The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代スコットランド社会経済史研究
Author(s)	北, 政巳
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35420
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏名・(本籍)	北(きた)　政(まさ)　巳(み)
学位の種類	経　済　学　博　士
学位記番号	第　7471　号
学位授与の日付	昭和61年11月1日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**近代スコットランド社会経済史研究**
論文審査委員	(主査) 教　授　竹岡　敬温 (副査) 教　授　作道洋太郎　　教　授　原田　敏丸

論文内容の要旨

本書の構成の概要――まず第Ⅰ部「連合王国の中のスコットランド」の第1章「序説――スコットランドの歴史的特質――」は，英国社会の中の「異国」・スコットランドの位置を一般的な視点から把握するための導入部である。第2章「スコットランド行政の歴史」では，スコットランド理解に不可欠な政治枠組の変遷をイングランドとの関係で把握する。さらに現代的関心からスコットランド独立運動，「権限委譲」(devolution) 問題，スコットランド諸政党の歴史と主張の相違を明白にしようと試みた。

第Ⅱ部「十八世紀の経済発展――合併（1707年）後の発展――」では，先進地域イングランドに対して後進地域スコットランドの「合併」後の工業化への助走を追跡する。第1章「スコットランドの合併とその結果」では，スコットランド経済が自立性を失い，いわゆる「経済的合併」を余儀なくされた諸事情を調査し，続いて合併後の変化を究明する。さらに，工業化の推進役を担った「製造工業者評議会」の活動を吟味する。第2章「繊維工業の発達」では，前章を受けて具体的に羊毛・毛織物，亜麻，木綿諸工業を対象にとりあげる。羊毛・毛織物工業は，合併後はイングランドへの下請・補完的役割として存続する。亜麻工業は，イングランドとは競合しないスコットランド土着工業として，製造工業者評議会の支援を得てイギリス亜麻会社（British Linen Company）を創立させて奨励されたが，しだいに衰微してゆくことになる。その亜麻工業での熟練技術を継承して，1780年代に著しく興隆するのが木綿工業である。ことにスコットランド綿紡績業が，マンチェスターから中古機械を購入して起業しブームを迎え，本格的なスコットランド産業革命の担い手として発展してゆく歴史をたどった。

第3章「鉄工業の発達」では，当初イングランドの木材枯渇から北上してスコットランドに進出した木溶鉱炉に始まり，1760年に創業された「ヨーロッパ最大の武器庫」と称えられたキャロン鉄工所

（Carron Ironwork）と，それに続くスコットランド鉄工業ブームを評価する。ことにスコットランド固有の有限責任制度が，イングランドの厳格なパートナーシップ規制と異なり，大規模な株式会社設立に役立ったのである。第4章「銀行業の発展」ではイングランド銀行創業の翌年の1695年に設立されたスコットランド銀行（Bank of Scotland）と1715年のジャコバイトの乱鎮圧後，1727年に親イングランドのグループによって設立された王国スコットランド銀行（Royal Bank of Scotland）の設立背景，両行の対立から協調，そしてスコットランド独自の地域協業銀行制度の確立への歴史を分析する。さらにA・スミスが『国富論』でとりあげたエア銀行（Bank of Ayr）の倒産を招いた1772年恐慌とスコットランド経済の関連を究明した。

第Ⅲ部「19世紀の経済発展――産業革命の展開――」では，スコットランドがイングランド経済の従属から英帝国を支える「並柱」の地位に上がる歴史過程を対象とする。特に強調したい点として，産業資本家・企業経営者の出自に焦点を合わせて研究した。第1章「繊維工業の発達」では，この時代を主導したのは木綿工業で，イングランドのランカシァ綿工業の無地織に対してスコットランドではグラスゴウ，ペイズリィを中心に高級極細・装身織に活路を見い出していた。このスコットランドの市場志向の商品生産が毛織物工業の再生を促し，いわゆる「格子縞織物」（tartan check）を作り出してヨーロッパ社交界の奢侈品として販売されてゆく過程を追求する。

第2章「鉄工業の繁栄」は，ニールスン（J. B. Neilson）の熱風溶鉱法の発明と土着の黒帯鉱石の利用により，スコットランド鉄工業は，未曾有のブーム期に入り銑鉄輸出市場を形成して従来のアメリカ市場から世界各地へ輸出した。そして伝統的なイングランドのミドランズ地域の高級鍛鉄，ウェールズの錬銑生産に対し，スコットランド鉄工業が銑鉄によりイギリス鉄工業地域分業体制を確立した過程を紹介する。第3章「鉄道業の時代」では，スコットランド鉄道ネットワークの生成過程，三大会社のカレドニアン（Caledonian）鉄道，北イギリス（North British）鉄道，グラスゴウ・南西部（Glasgow & South Western）鉄道の成立過程と鉄道企業家の出自を浮彫りにする。ことにグラスゴウ市北郊外のスプリングバァーン（Springburn）が「鉄道の都」と称えられ，世界への蒸気機関車輸出基地となったことに注目した。

第4章「銀行業の発展」では，キャメロン（R. Cameron）教授が世界の銀行制度を比較・検討し結論づけた「スコットランドと日本とが，その独自な経済が必要とする成長要件に銀行制度の構造と機能とを最もよく適応せしめた代表的な例」（正田健一郎他訳『産業革命と銀行業』日本評論社，1973年，402頁）と述べるごとく，イングランド銀行業の影響下に存立しながら，逆に影響を与え真のイギリス銀行業の秩序形成に貢献したスコットランド銀行業の利点，歴史的沿革，制度枠内での諸銀行の機能分化，それらの盛衰の究明を試みた。

補論「スコットランドの独自性」では，第1章「実業教育の伝統」をとりあげ，非経済的要因ながら結局はスコットランド社会経済の独自な発展に著しく貢献した実業・技術教育の起源・歴史的沿革を探り，その産業革命期の開花を評価する。さらに第2章「ウィスキー工業史」では，スコットランドを代弁する産業でありながらいまだ学術的には紹介されていないウィスキー工業を対象に，その発展とスコットランドの歴史を相関させて分析した。ことに産業革命期の蒸留方法の技術改良，イングランドとの対

抗，さらに諸企業間の競争から醸造業者協会（Distillers Company Limited）設立に至る過程を論じた。

論文の審査結果の要旨

本論文は，きわめて精力的な文献・資料の渉猟によって一部は，スコットランド現地資料に基づいて，イングランドとともに大英帝国の発展を支えたスコットランドの社会経済の発展をイングランドと対比しながら，又イングランドの経済発展との相互的な影響関係をあきらかにしながら，全体的に論じたわが国最初の研究であり，スコットランド経済史研究の先駆的な業績としてその意義はきわめて大きい。

すこし内容が網羅的であり，個々の問題についてはもっと立ち入った分析が必要だとおもわれる点もあるが，わが国ではじめて近代スコットランドの経済発展の全体的な歴史像をえがきあげ，イングランド偏重であったイギリス経済史研究の状況を大きく改めた開拓的な研究としての本論文の功績は大きいと評価され，本論文が経済学博士の学位に価するものと考える。